

出品作家プロフィール

2019年3月19日(水) - 3月21日(金)

上嶋浩綺

UESHIMA Koki

2001年生まれ

就労支援施設ヴィレッジれん

2019年3月中丹支援学校を卒業。同4月からグループホーム180番地で生活、就労支援施設ヴィレッジれんで創作活動に励む。

支援学校時代から、内的な想像力で、自分で考えた独自のクロスワードパズルを作ったり、自分で考案した難度の高い折り紙を作ったり、ファンタジーの世界を小説化するなど、存分に才能を発揮されてきた。

特に、精緻な創造の地図は、下絵を描かず、色とりどりのボールペンをつかって一気描き上げる手法。地名も架空の地名。お菓子の地名、お花の地名、それは、ご本人にとって、全く安全な安心できる世界を表す言葉がちりばめられている。

木引英明

KIBIKI Hideaki

1960年生まれ

就労支援施設ヴィレッジれん

12歳頃、父親の仕事の関係で大阪から茨城へ引っ越し、その後千葉へ移る。18歳まで東京の日本デザイン専門学校（現：日本デザイン福祉専門学校）のグラフィックデザイン学科に通い、卒業後は大阪に戻ったあと、京都・亀岡市へ両親とともに移住。

12歳頃、父親の仕事の関係で大阪から茨城へ引っ越し、その後千葉へ移る。

18歳まで東京の日本デザイン専門学校（現：日本デザイン福祉専門学校）のグラフィックデザイン学科に通い、卒業後は大阪に戻ったあと、京都・亀岡市へ両親とともに移住。

スケッチブックに鉛筆や色鉛筆を用いて描く、繊細な動物画とコミカルなイラストが特徴。作品制作は自宅、施設と場所を問わずほぼ毎日行なっている。

山口慧太郎

YAMAGUCHI Keitaro

2000年生まれ

一般社団法人 ヴァリアスコネクションズ

ツナガリの福祉所

京都市在住。小学生の頃から、色々なペンを取り替えながら、色味や書き味を確かめるようにペンを走らせていた。高校生になり、学校で大きな旗や絵画を制作することがきっかけでグルグルと円を描くようになる。現在では、紙とペンがあればどこでも行うようになった。

通所する「ツナガリの福祉所」では、2019年からドローイングと共にデジタルカメラを使った写真撮影を始める。外出支援の際には、1時間ほどの撮影で写した画像が100枚を超えることもある。レンズを左手で覆いながら撮影された写真

《手がかり》は、シャッターを切るという行為を山口が指先を通じて楽しんだ痕跡なのだろう。

施設では一番落ち着く陶芸室で過ごすうちに、土を指先で丸めたり見まねで叩いたりしながら土の作品を作るようになる。通称「かつ玉」。近年それらを板の上に規則的に並べ、「うまくできました」と告げた。

また「絵描きます」と言うときクレヨンや色鉛筆などを使い、素早く物凄い勢いで紙に描写していく。数字や自分の名前を書いたうえから、色とりどり線のストロークを幾重にも重ねている。勢いあまりはみ出したクレヨンの集積は下敷きに凹凸を形成し、ドローイングに新たな表情を与える。陶土形成から古紙の紙ちぎり、ドローイングなど花から花へと移る蝶のように、勝山の創作は続いている。

勝山雄一朗

KATSUYAMA Yuichiro

1984年生まれ

京都市ふしみ学園 アトリエやっほう !!

施設では一番落ち着く陶芸室で過ごすうちに、土を指先で丸めたり見まねで叩いたりしながら土の作品を作るようになる。通称「かつ玉」。近年それらを板の上に規則的に並べ、「うまくできました」と告げた。

また「絵描きます」と言うときクレヨンや色鉛筆などを使い、素早く物凄い勢いで紙に描写していく。数字や自分の名前を書いたうえから、色とりどり線のストロークを幾重にも重ねている。勢いあまりはみ出したクレヨンの集積は下敷きに凹凸を形成し、ドローイングに新たな表情を与える。陶土形成から古紙の紙ちぎり、ドローイングなど花から花へと移る蝶のように、勝山の創作は続いている。

ゆびさきのこい

2021.1.19 (Tue) - 3.21 (Sun)

10:00-18:00 (※Closed Monday)

入場無料

2021年1月19日(水) - 3月21日(金)

上嶋浩綺 / UESHIMA Koki

勝山雄一朗 / KATSUYAMA Yuichiro

木引英明 / KIBIKI Hideaki

山口慧太郎 / YAMAGUCHI Keitaro

2021年1月19日(水) - 3月21日(金)

10:00-18:00 (※Closed Monday)

2021年1月19日(水) - 3月21日(金)

10:00-18:00 (※Closed Monday)

本展では「ゆびさきのこい」と題して、4名の作家による絵画、素描、写真、立体、映像など、幅広いジャンルの作品をご紹介します。

カメラのレンズに指をかけたまま日々撮影される写真や、豆粒ほどに焼成粘土の成形を繰り返す行為。また、鉛筆で細部に至るまで描き込まれた画面の中に浮遊感漂うイラストが共存する絵画。さらには地方公共団体や地形をはじめ交通機関などもすべて想像によって創作された架空の精緻な地図描画。これら指先から生まれた細やかな創造物と、一見すると無秩序とも思われるそれらが

内包する「こい=故意」とは何か。純粋な遊戯の喜びであるのか、また表現欲求の軌跡なのか、作品は観察者に戯れの視点をもたらします。この機会が、まだ見ぬ「こい」に巡り会えるささやかな契機となれば幸いです。

最後になりましたが、本展に貴重な作品をご貸与いただきました各出展作家のみなさま、ご協力いただきました施設、ご親族の方に御礼申し上げます。

主催：きょうと障害者文化芸術推進機構、art space co-jin
協力：就労支援施設ヴィレッジれん、京都市ふしみ学園 アトリエやっほう !!

一般社団法人 ヴァリアスコネクションズ ツナガリの福祉所

2021年1月19日(水) - 3月21日(金)

10:00-18:00 (※Closed Monday)

2021年1月19日(水) - 3月21日(金)

10:00-18:00 (※Closed Monday)

2021年1月19日(水) - 3月21日(金)

10:00-18:00 (※Closed Monday)

art space co-jin

きょうと障害者文化芸術推進機構

出品作品リスト

上嶋浩綺 | UESHIMA Koki

- 1 《萌花共和国地図》2019 | ボールペン、色鉛筆、紙
- 2 《小都中央国地図》2020 | ボールペン、色鉛筆、紙
- 3 《時苺火山諸島地図》2019 | ボールペン、色鉛筆、紙
- 4 《題名不明》2020 | 折り紙

勝山雄一朗 | KATSUYAMA Yuichiro

- 5 《かつ玉》2010年頃～ | 陶土
- 6 《紙ちぎり かつ箱》2019年～ | 紙
- 7 《勝山雄一朗 資料映像》
映像提供：アトリエやっほう !!
- 8 《無題》2019～2020 | 紙、クレヨン
- 9 《無題》2019～2020 | 紙、クレヨン
- 10 《無題》2019～2020 | 紙、クレヨン
- 11 《無題》2019～2020 | 紙、クレヨン
- 12 《下敷き》2019～2020 | アクリル板、クレヨン

木引英明 | KIBIKI Hideaki

- 13 《無題》制作年不詳 | 鉛筆、印刷、紙
- 14 《Zoo》制作年不詳 | 鉛筆、紙
- 15 《無題》制作年不詳 | 色鉛筆、鉛筆、紙
- 16 《妥協しない動物画》制作年不詳 | 紙、鉛筆、色鉛筆、フェルトペン
- 17 《無題》制作年不詳 | 色鉛筆、鉛筆、紙
- 18 《無題》制作年不詳 | 紙、鉛筆、色鉛筆、フェルトペン
- 19 《無題》制作年不詳 | 紙、鉛筆、色鉛筆、フェルトペン
- 20 《無題》制作年不詳 | 紙、鉛筆、色鉛筆
- 21 《無題》制作年不詳 | 紙、鉛筆、色鉛筆、ボールペン
- 22 《駱駝》2019 | 紙、鉛筆
- 23 《無題》制作年不詳 | スケッチブック

山口慧太郎 | YAMAGUCHI Keitaro

- 24 《手がかり_植物園(2020/2/21)》2020 | 1分9秒
編集：art space co-jin
- 25 《手がかり》制作年不詳 | インクジェットプリント
- 26 《きせき》制作年不詳 | 紙、色鉛筆
- 27 《きせき》制作年不詳 | 紙、色鉛筆
- 28 《きせき》制作年不詳 | 紙、色鉛筆

作品解説

4 《題名不明》

地図の絵画制作にも共通する空間認識の能力を活かし、定規などを一切使用することなく制作された、上嶋独自のオリジナルの折り紙。制作に際して、下書きや図面などは使用しない。

5 《かつ玉》

陶土による制作《かつ玉》。陶土を細かくちぎり、指先で丸める制作を行う。米粒に見立てたおにぎり型の陶芸製品にもつながった。最近では、多様な形を組み合わせて規則的に並べることも多くなり新たな展開を見せている。

6 《紙ちぎり かつ箱》

2019年《かつ玉》の制作に適した硬さの陶土がないときに、代わりに始めた貼り絵がきっかけとなり、《紙ちぎり》は始まった。広告やカタログなどの古紙を細かく手でちぎり、《かつ箱》と呼ばれるボール紙で作られた箱に入れて集積していく。投入口の大きさが違う《かつ箱》が数個あり、それに合わせたサイズにちぎり入れている。

12 《下敷き》

ドロ잉の下敷きに使用しているアクリル板。紙からはみ出す強いストロークが生み出したクレヨンの集積跡。この上で描かれる作品に独特のテクスチャーをもたらす。2枚重ねて使用しているうちの1つを額装したものの。

16 《妥協しない動物画》

すでにイラストが描いてあったページの空白に、鉛筆による細密画を「妥協しないで」描き上げた。極めて丁寧に細かなタッチの描写が、なぜこのページではなかったのか。他の作品にも共通する木引の「理」の戯れが顕著にみられる。

24 25 《手がかり》

週1～2回の外出支援の際に撮影されるデジタル写真。カメラのレンズの出っ張り部分に左手をかけながら撮影された写真は、手の隙間からわずかに差し込んだ光が、山口自身の手を照らし、画面を赤く輝かせて抽象的な画面を作り出している。中には、その隙間から外側の世界が垣間見えることもある。

26～28 《きせき》

《きせき》は、右手には一本のペンを、左手にはたくさんのペンをもち、それらのペンを持ち替えながらグルグルと円を描きながら制作される。その行為はすぐに終わることなく、グルグルと描かれた円は時間をかけて画面を覆いつくしていく。そのドロ잉は、山口さんのその日のリズムが、円や点や線となって画面上に軌跡を残している。

